

---

## 詩歌・小説の中のはきもの (第22回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

---

208 片岡義男の『銀座で夕食の約束』という小品の描写である。

〈彼女たちは、二十代後半の、ほとんどおなじ背丈の、ほどよくほっそりした、よく似た体型をしていた。…〉

履いている靴まで似ていた。ヒールの低い平凡な黒い靴である。なのに、ふたりには決定的に異なるところがあった。〈それは、歩道を歩いていくときの足音だった。ヨーロッパの白人女性の足音は、片仮名の音で書くと、コッ、コッ、コッという音だった。コツ、コツ、コツではなく、ツの字を小さくして、コッ、コッ、コッだ。一步ごとに、彼女の足音は、その前後の音から独立して、くっきりと切れていた〉

では、日本女性のほうはどうだったか。

片仮名での再現はなかなか難しいが「試しに書いたら」「ガタコーラ、ガラコータ、ガコラータというような音だった。」

関川夏央

★『中年シングル生活』の「やさしい足音、かたい足音」から。足音の聴き方もいろいろある。同じ聴くなら楽しく聴くほうがいい。志賀直哉は「夜、戸外をさくりさくり音をさせながら人が通る。寝ながら聴いていると、それが如何にも親しみのある落ちついた気持にさせた。(プラトニック・ラブ)」と書いている。だが平成六年の歌に「門前に軍靴の音す息つめて兄かと思えば聞こえずなりぬ 山本矩子」という深刻なものもある。近ごろの密閉性の高い建物に暮らしては、夜間に外に行く足音は聞こえなくなってしまった。

209 西洋人が日本にやってきて、無気味に感じるもののなかに、日本人が靴底を地面にすって歩く音がある。日本では靴底を地面に対してひきずるように歩く人が、意外に多い。

西洋のお化けには、日本とちがって足がある。そして靴底をひきずって歩く。多くの日本人が靴底をひきずって歩く音は、まさにお化けがやってくる音だ。

加瀬英明+アンドリュー・ホルバート

★『背広とチョンマゲ』から。初めて日本に来た気の弱い西洋の婦人は、靴底をする音を聞くとおびえるという。靴を引きずって歩くと、早く減るので足を上げて歩くのだという。ヨーロッパのどの国においても靴は貴重品だった。西洋人の歩き方がそのような経済的な理由からくるものであるとしたら、経済大国の富民である多くの日本人は、靴の減ることなどそれほど気にはしていないから、永遠にズルズル靴底を擦って行くことになってしまう。

210 玄関の縁がわの上から、おきぬはせき立てるように言った。吾一はそう言われると、なおわくわくしてしまったが、綺麗なのを出せば、きっと気にいるのだと思い、畳つきのこまゲタを取ってクツぬぎの上にきちんとそろえた。

するとおきぬは何も言わずに、黙ってそれをひだりの足のつまさきで軽くけた。しかし、吾一は、おきぬがよろけたのかと思って、もう一度丁寧にそろえなおすと、また同じようにけとばした。

山本有三

★『路傍の石』から。吾一は同級生秋太郎の家に奉公に出る。吾一という名前はギスギスしているからといって、商人らしい五助と名を改められた。秋太郎の妹おきぬを「お嬢さん」と呼ばされ、玄関で履いて行く下駄を要領よく差し出せず「じれったい人ね」と叱られる。中学のまぶしいばかりの制服を着た秋太郎には、縁側から「ねえ、クツを出してったら……」と足をによきと投げ出されて悔し涙を流す。

211 当時、一中の生徒は白い布地のゲートルをはいていた。はぎの外側で合わせて、ボタンでとめるようになっていた。ゲートルの末端は、正しくはけば靴に密着する。すると靴とゲートルの間から、靴下の色がのぞくのだった。いや、靴下をのぞかせるために、出来合いを買わず、わざわざ短いのを注文する者もいたらしい。それが当時の中学生の出来る、せいっぱいのおしゃれだったのだろうか。  
湯川秀樹

★『旅人』から。大正八年、京都府立一中に入学したころの思い出である。靴にまつわるファッションのこまごましたことなどというものは、服飾史にもはきものの歴史にも出てこない。このような中学生たちのいじましいばかりのお洒落について、ノーベル賞学者、それも物理学者が書き留めておいてくれたことに感謝したい。

212 この娘たちの誰かが、夜会服、礼装用のワイシャツ、シルクハット、蝶ネクタイ、白のキッドの手袋にパテント革の靴といった服装の男と連れだててくることがよくあったが、当時のクライドにとってそうした服装は、真の意味での傑出、美とおしゃれと幸福を決定づけるものに見えた。あんな背広をあんなふう気楽に堂々と着こなすことができれば！  
セオドア・ドライサー

★『アメリカの悲劇（宮本陽吉訳）』から。主人公クライドが出世のために女を殺すという小説。だが、彼の憧れる上流階級の服

装のなんと月並みなことか。大仏次郎の『帰郷』にこんな記述がある。「新興階級の紳士を見て御覧なさい。悉く、標準型で、ショウウィンドウ趣味なんです。崩すことも作ることも知らないのだ。アメリカの雑誌の広告を見ると、帽子、服、靴から靴下の色まで親切に組合わせて、三色版で、きれいに並べてありますがね。一揃い、何十ドルで出来るって、テキサスあたりの田舎に住んでいても、郵便為替一つで注文出来る」。上流も中流も退屈な服装だったのだ。

213 リア王 人間、生まれてくるとき泣くのはな、この阿呆どもの舞台に引き出されたのが悲しいからだ。これはいい帽子だ。フェルトで騎兵隊の靴を作るか、うむ、巧妙な作戦だ。いずれ試してみよう。そして婿どもの邸に足音を忍ばせて不意打ちをかける、それ、容赦はいらぬ、やれ、やれ、やれ、やれ！  
シェイクスピア

★『リア王（小田島雄志訳）』第四幕第六場。銀行預金の通帳を握って離さない親はいくらもいる。社長・理事長、議員なども肩書きを失ったとたん、周囲から冷遇されて、多かれ少なかれリア王と悲しみを同じくする。いや、失礼、フェルトの靴の話だった！いつも高い所から人を見下ろしている騎兵はプライドが高い。馬上で死ぬことを最大の名誉とし、だらしなく地面をさまよい歩くことを前提にしていないから、それを誇示するためのフェルト製なのである。

214 権大納言の御沓取りてはかせ奉り給ふ。いと物々しく清げによそほしげに、下襲の裾長く引き、所せくてさぶらひ給ふ。あなめでた、大納言ばかりに沓取らせたまつり給ふよと見ゆ。  
清少納言

★『枕草子』・「関白殿、黒戸から出させ給ふとて」の段から。高い身分の権大納言伊周が自分の父親、清少納言の仕えていた中宮定子の父でもある、関白藤原道隆に沓を履かせる姿が、すっきりと美しく威儀を正

しており、素晴らしいというのである。現代でも、病院や旅館で老いた親に甲斐甲斐しく履物をはかせている人を見かけると、何か一日が楽しくなる。靴は親孝行の小道具にもなるというのが嬉しい。

215 靴磨き 胸に番号札がついているのは警察の登録番号。一人五十エンで、だいたい一日に三十人から五十人。場所は警察がきめてくれ、縄張りというようなものはとくにない。お婆さんの一人に話を聞くと、昼の暑いときは喫茶店かビルのかげにゆく。ドアがあくたびに冷房の風が吹きだしてきていいぐあいなのである。冬は日だまりを追って一日のうちに何度も移動する。客がないとすわったまま居眠りをすることもある。雨になるか曇りになるかは、空を見なくても道がチクタクと関節に教えてくれる。

もう十四、五年ここで靴を磨いてきたという…

開高 健

★『ずばり東京』から。一九六〇年代前半の東京の諸相、遺失物、新宿、工業倶楽部、動物園、スリ演歌師、画商などを開高の眼でめぐりとっている。ルポルタージュとしても傑出した作品。有能な小説家がこんな記録を残してくれたのは有り難い。山手線の主要駅に靴磨きが店を出していたころは、下ろしたての艶とは異なる、一見磨きたてと分かるピカピカの靴が街中でよく目にできたものである。

216 ポリッシュ（ワックス）と水が馴染むことで、革の表面は輝きを取り戻す。最後は乾いた清潔なネルで磨いて仕上げ、生き返り、鏡のごとき光を宿した靴を眺めるのは、まさに至福の瞬間だ。靴に対する愛おしさも増す。履き込み手入れを繰り返すことで、靴は熟成していく。器が育つと同じだ。ゆっくりと育つ靴を矯めつた眇めつすがしながら、そして次の一週間の予定を思い起こし、靴と服をどう組み合わせるか、あれこれ思い巡らせるのだ。

中島 渉

★『靴を育てる』から。著者は事こまかに靴磨きの仕方を記しているのだが前半を割愛した。「靴を育てる」というのが嬉しい。昔、登山靴を誂えたとき、靴屋の親爺に「たまに靴を見せに来てくださいよ」と言われたが、今その気持ちがよく分かる。街頭の靴磨きがだんだんに消えていき、今の若い人たちはプロに学ぶ機会がない。どうやって靴の磨き方を覚えるのだろう。巷には一見して可愛がって育てられていないと分かる靴が多い。カサカサに油が切れ、虐待された靴を見ると、育て方も可愛がり方も知らないのだろうと歯がゆくなる。

217 大学の頃にも、私は普通の服装のつもりでゐたのに、それでも、友人に忠告された。

ゴム長靴が、どうにも異様だと言ふのである。ゴム長は、便利なものである。靴下が要らない。足袋のままで、はいても、また素足ではいても、人に見破られる心配がない。私は、たいてい、素足のままでいてゐた。ゴム長の中は、あたたかい。家を出る時でも、編上靴のやうに、永いこと玄関でしゃがんで愚図愚図してゐる必要がない。すっぽりすっぽりと足を突込んで、そのまますぐに出発できる。脱ぎ捨てる時も、ズボンのポケットに両手をつっこんだままで、軽く虚空を蹴ると、すっぽりと抜ける。水溜りでも泥路でも、平気で闊歩できる。重宝なものである。

太宰 治

★『太宰治滑稽小説集（木田元編）』の「服装に就いて」から。昭和二十年代は田舎はもちろんであるが、都会の下町でも年がら年じゅう仕事ばきとして長靴を履いている人がいた。家庭用煙突製造のわが家でも水仕事を中心だったのと、長靴を従業員に支給していたので、自前の履物は大切に、みんな長靴を履いていた。私もセメントのこびり付いた履き古しの長靴の筒を切って短靴にし、高校への通学に履いていた。親から靴代は別にもらっていたのだが。